

### お聞きしたかったこと

袖井, 林二郎

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

391

(終了ページ / End Page)

394

(発行年 / Year)

1986-03-13

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002957>

## お聞きしたかったこと

袖井 林二郎

中野先生にお目にかかったことは、実は数えるほどしかない。それでいて、どの場面もいまだにクッキリと心に刻まれているのだから、やはり並々ならぬ御人柄であった。

私は直接の師というものにあまり恵まれず、これまで学問でももの書き修行の途でも、敬い従ったのは、服部之總、大宅壮一といった、生前一度も会うことなく終った人々である。中野先生もそうした「まよた 賤しんの師」に近い。

最初にお会いたした印象は強烈であった。私は一九六九年の夏はじめて沖縄を訪れ、そして御多分にもれず、強烈な「沖縄病」にかかってしまった。つまり、それまで沖縄問題に全く無知だった自分を恥じ、沖縄のために何かをしなければ、自分のこれまでの学問さえ危うくなる、という気持ちにとらえられたのである。

時にベトナム戦争はそのピークにあった。沖縄の基地なしにアメリカの軍事介入は不可能である以上、米軍による沖縄での無法と人権無視の実態を、英文パンフレットの形で米国民に訴えることによっ

て、基地保有の現状にクサビを打ちこめたら、という考えを抱いて同志の人々と相談してみた。その一人で沖縄の無国籍児の問題にとり組んでいた、石田玲子さんにもなわかれて、私は中野先生に教えを乞うべく参上したのである。

しかし急性「沖縄病患者」の悲しさで、熱ばかり高くてということがさっぱりまとまらない。そのうちにUSCAR（琉球列島米国民政府）とUSARRYS（在琉球米陸軍司令部）をとり違えるたぐいの、基本的な間違いを犯してしまつたらしい。とたんに「それは違うのではありませんか」と、真向唐竹割りにやられてしまった。

結局このアイデアはまとまらず、後で原爆被爆者の証言集、GIVE ME WATER、という形をとるのだが、沖縄問題については、よほど勉強しないと中野先生の前には出られないぞという思いを、この経験は私に抱かせた。怖い人だと思いつつ、私は歴史家としてまた市民運動家としての先生の著作と行動を、高い山でも目ざすように仰ぎ見て、そこから学ぶことに努めて来た。

「年をとつたら中野先生のような老人になりたい」という私の口癖を、先生のゴルフ友達がとりついでくれたことがある。「袖井君は、わしのことをよく知らんのかな」というのが、お答えだったという。並たいていの修行では、あれだけの「荒法師」にはとてもなれない道理である。

それにしても、生前にお聞きしたいことが一つあった。戦後すぐ、ある新聞からきた戦争犯罪人指摘の葉書アンケートにこたえて「中野好夫」と記されたのは有名な話だが、これを先生一流の偽悪者ぶり

ととることは正しいのであろうか。御自身が「また戦争協力ということからいっても、わたしは明らかに協力者の一人だった（少なくとも例の十二月八日以後は）。大学教師および文筆人として、いわゆる追放条件にこそ該当しなかったかもしれないが、自身の反省としてはどう考えても協力者だった」（「酸っぱい葡萄」みずず書房）といっておられる。

その意味で興味深い一通の密告書のコピーが私の手もとにある。数年前に米公文書館のファイルからみつけ出したもので、GHQ「公職適否審査委員長」あての葉書である。消印は一九四七年七月二二日。全文を引こう。

日本の再建の為にお拂ひ下さる御努力に、感謝いたします

東京帝国大学文学部助教中野好夫のやうな悪質な戦犯者を一日も早く、最高学府から追放なすつて下さるやう願ひします

彼は、戦争中、各工場を巡回して、青年たちの戦争を煽る講演をして歩きましたほか、アメリカ文化研究会といふ反米の団体を組織して、アメリカ排撃の一大運動を展開しようとしてました。その趣意書は若い英文学者たちの手元に配布されましたが、今日もしそれが残ってゐたら、直ちに追放になるところです。終戦後も彼は、公然、自分が誤つてゐなかつたと放言してゐます。彼は某右翼団体の主脳者でした

署名もないこの投書にどれだけの嘘と真実が含まれているのか、私にはわからない。大学教師の戦争協力責任について、東京帝大はかなり厳しい態度でのぞみ、何人かが教職を追われたが、中野先生が問題になったということは、ついぞ聞かない。

しかし、先生が戦後にみせた平和運動への献身は、戦争協力への責任感がバネになっていると、私は信じて疑わない。天がもう少し時をかせていれば、先生自身が自伝の中で、戦争中の行動について書かれたに違いない。先生の御存命中に、この密告の書をお見せして、それを糸口に戦争中のことについてお聞きしたいと思いつつ、果せなかったことが何とも残念である。

その機会が失われた今、こうした文書を世に出すのは、非礼には違いないが、中野先生は歴史家として、私のこの行為をお許し下さるに違いない。あとは先生の伝記を書く方に期待するだけである。